

森本修教授のこと

真鍋昌弘

森本修教授は平成三年五月四日逝去された。五十九才であった。奈良教育大学国語科教官としては、長老格であったが、当然これからもさらに活躍が期待されるべき年齢層であったわけで、それだけに為し遂げねばならぬ研究上の数多くの課題を、胸に抱いておられたことであろうと思うと、ほんとうに残念でならない。亡くなられる三日ほど前、私は新年度諸行事で忙殺されていたが、やっと一日の空きをみつけて、長岡京市にある京都済生会病院を訪ねた。奈良教育大学で研究室を並べるようになってから五回目である。昭和57年に赴任されてから入院は三回目であったと思う。新学期には元気になって出講したいと話しておられたが、いざ入院してみると、やはり長期の治療が必要だということで、急ぎよ教授担当の講義は然るべき非常勤講師に頼ってはじめてゆかねばならず、そのことの打合わせがとりあえず必要であったのである。教授は私が来るのを待っていて下さった。ベッドの上での教授は、いつもの声量はなかったし、苦しそうではあったが、それでも順を追ってしっかりと口調で話された。奈良大学教授浅田隆、近畿大学助教浅野洋両氏のお名前と電話番号を書いたメモ用紙を手渡され、このお二人にお願いしておいたので、大学側への連

絡などよろしく頼むということであった。教授がもっとも信頼を置いておられる方々に当面助けていただるのなら、と私もほっとしたとともに、入院という思わしくない状況にあっても、こうした処置を着実にとって下さったことに感謝した。卒業論文指導の学生二名についても、その進行状況や今後の段取りのことなどに及んで話しておられたが、その後、自分の病状について、今は腹水を取り除く治療と栄養補給の点滴を行っていると、一語一語噛み締めるように、しかも冷静に整然と話された。すこぶる客観的であった。とても逞しいものを感じた。それだけに、私はふつと胸が詰まった。その日は、あまり長く話してお疲れになるだろうし、夕刻には次の用事があったのでわずか三十分くらいで病院を出た。エレベーターのところまで送って来られた奥様は、主人は講義の事を伝えることができたのできつと安心したと思う、といった旨の事を話された。芥川龍之介一筋に、その作品や伝記を究め、発表されてきた著書や論考のあれこれの思い浮かべながら、私は帰り道を急いだ。電車の駅はすでにラッシュアワーで混雑していた。その日は、雑踏がなにかつかしいような気がした。教授の研究室はいつも美しく整頓されていて、空気は澄んでい

た。教室では厳格に出欠をとられ、なまける学生達にはとてもきびしく対処された。だから逆に意欲ある学生は教授を敬愛した。助手の時代から多くの難関を通り抜けて来られたこともあって、自分の信念をはっきりもって、奈良教育大学に来られてからは、じつくりと沈着であった。水際立って人柄に整然としたものがあり型があった。指導を受けた学生の卒論においても、作品の背景としての作家の伝記、先学の考察の紹介、最後に自分の考えと言うようにつねに三章仕立てで一貫されていた。完璧なまでに整然とした教授のものの考え方が反映しているのである。森本修教授の美学と言ってもよい。もちろん親身になってあたたかい言葉もかけて下さった。そうした思いやりの一面については、またなにかの機会に述べることもであろう。教授の思い出の中の一面である。ご冥福をお祈り申し上げます。

(まなべ・まさひろ 奈良教育大学教授)